人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	地域や関係諸機関との積極的な連携・協力が行われている実践事例

１．基本情報

○都道府県名及び市町村名

島根県安来市

○学校名

安来市立第三中学校

○学校のＵＲＬ

２．学校紹介

○学級数

「通常の学級」全学年各2学級　「特別支援学級」2学級　（合計）８学級

○児童生徒数

「全生徒数」174人（平成23年12月19日現在）（内訳：1年生54人　2年生62人　3年生58人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

≪学校教育目標≫
　自主・・・自分で考え、計画を立てて、根気強くやり抜く人間の育成
　誠実・・・まじめに取り組んで責任を果たす、実行力のある人間の育成
　協同・・・自他を敬愛し、助け合いながら切磋琢磨する人間の育成
　健康・・・心身ともに健康で、個性豊かな、活力のある人間の育成
≪研究主題≫　（平成20年度～22年度）
　「互いに支え合い　学び合う　安来三中生徒の育成」
　　～人権・同和教育を基底に据えた学校づくり～

○人権教育にかかる取組の全体概要

○学校の教育活動全体を通して実践する、系統性を重視した指導計画の効果的実践
　安来市立第三中学校区は、平成20年度～22年度の３か年において文部科学省の「人権教育総合推進地域事業」の指定を受けた。本校はその推進協力校として「よりよい集団づくり」と「地域との連携」を柱に人権教育を進めてきた。その推進に当たっては、人権教育を学校の教育活動の基底に据え、各教科等で縦断的、横断的に学習できるように年間指導計画を作成した。

○生徒の主体性を尊重した指導方法の工夫
　「よりよい集団」を育てるためには、構成員である生徒の自己肯定感や自己有用感を高めることが大切である。そのために生徒が達成感を味わう体験や学習活動、また多様な考えや思いにふれ共感しあえる学習活動の場を設定した。そのような場を設定することが、生徒の自主性を生み出す原動力と考えた。

○人権教育推進に関する点検・評価アンケートの教職員・生徒・保護者への実施及びその結果の分析活用
　教職員への「学校評価」、生徒対象の「学級集団の傾向を把握するためのアンケー

ト」「言葉アンケート」「各種活動のふり返り」、保護者対象の「学校アンケート」等の結果から、3か年の実態や意識の変化を把握し、次年度の研究の方向性を策定するために活用した。また、安来三中PTA教育文化部では「人権意識調査」を実施し、実態把握や活動のふり返りを行った。

○家庭・地域との連携、校種間連携

人権教育を進めていくには地域への啓発や、地域との連携が大切である。したがって、地域の人々と関わる場面や内容を学校の教育活動に意図的に設定し、地域とともに学ぶ姿勢を大切にした。また、地域の人々の願いや思いを受け止めてそれを授業の中に生かし、地域の人材を積極的に授業の中に取り込んでいった。

校区に3つの小学校がある本校では、従来から小学校との連携を密にしている。近年は幼・保との連携も重視して「0歳から中学卒業までを見通した人権に基づくカリキュラム」の作成を行い、学習内容に系統性をもたせるようにしてきた。

３．特色ある実践事例の内容

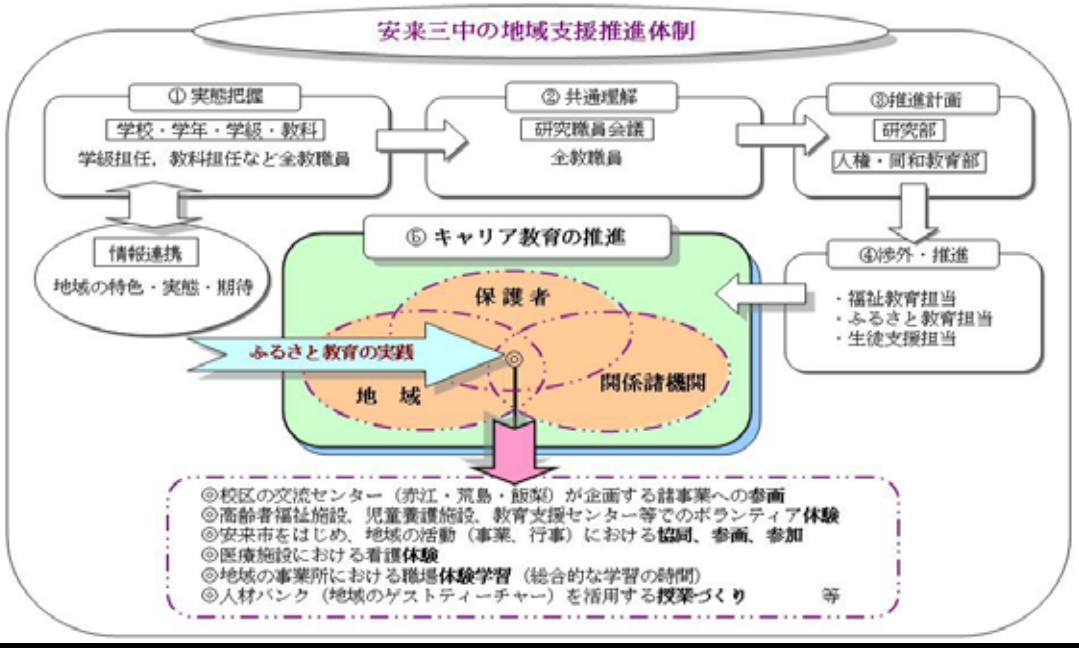
◆校区の交流センターと学校を核とした地域ぐるみの人権教育の取組

（取組のきっかけとねらい）

安来市立第三中学校校区は平成20年度から22年度までの3か年間、文部科学省より人権教育総合推進地域事業の指定を受け“自立と共助のまちづくり”を目指し、地域と協同し様々な取組を積み重ねた。そして、平成23年度に入り、三年間の取組を振り返りながら校区にある３つの交流センターと学校は、人権・同和教育を連携の基底において“地域ぐるみによるより充実した人権教育”を目指しながら、年度初めに次の3つの進路保障強化事業を計画した。

① 荒島地区：“ふるさと教育”の指導計画を地域講師と協同して作成し実践する
② 飯梨地区：人権について考える“懇話会”を地域と協力して開催する
③ 赤江地区：人権啓発事業として、人を育て高める“ふれあいコンサート”づくりに参画する

「地域の教育力を高める」ことを共通のねらいとし、特に③については安来市の事業補助金制度の活用と島根県内の文化振興財団、安来市内の企業の協賛(資本協力)、報道各社の後援を受けて学社連携のもと、平成23年10月30日に開催する運びとなった。



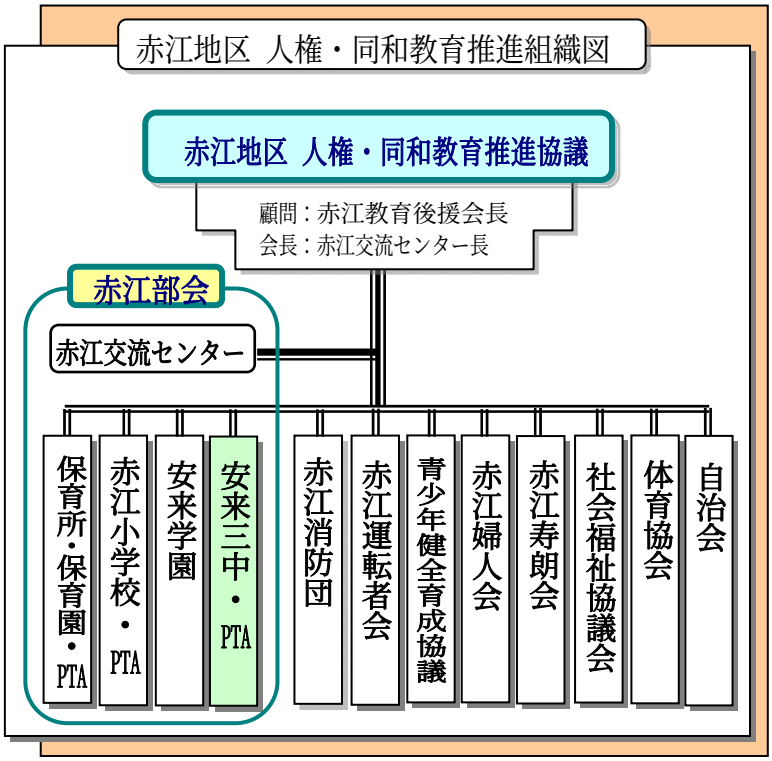
（実践〔事業〕の内容）

赤江地区人権・同和教育推進協議会が実行委員会となって、山陰フィルハーモニー管弦楽団を招致して小学校と中学校、そして赤江地区の諸団体が連携と協力しながら協同で「人を育て、高める、心ふれあうコンサート ～ 山陰フィルあかえふれあいコンサート ～ 」を企画し開催する。(会場：赤江小学校体育館)

（取組の主体、実施体制〔チームの編成、体制など〕）

平成20年、赤江地区にある赤江交流センターは既存の諸組織をネットワークとして整備し、人権教育と人権啓発の視点に立って、赤江地区人権・同和教育推進協議会を立ち上げた。(以下、協議会とする)　さらに、協議会と地域の諸組織をつなぎ牽引する基盤組織として、赤江部会を発足した。

協議会は、子どもたちをはじめ安来市民すべての人権を守るために、住みよい町とは「認め合い、支え合う町」であると定義し、「地域ぐるみで認め合い・支え合う町づくり」をテーマとして掲げ、地域全体による町づくりを推進している。赤江部会では、これまで積み重ねてきた諸活動を見直すと同時に、学校・家庭・地域が積極的に連携しながら「お互いの人権を認め合い、支え合う」という視点に立って、様々な情報の交換と整理を行っている。



平成23年3月11日、未曾有の大災害が東日本列島を襲った。赤江部会では被災地の状況を思い図ると同時に、義援金や支援物資の募集だけではなく、「いま、私たちになにができるのか」について話し合った。故郷に暮らして、日々、挨拶を交わしあえることの有難さも改めて実感した。

部会では、「心ふれあうこと」、「この命とめぐりあいに感謝すること」、そして「人と人が優しくつながり合うことの大切さ」など様々な意見の交換を通して、協議会に「人権啓発事業」の提案をすることにした。

＜赤江部会からの提案＞

赤江地区の諸組織と学校保護者が連携し、推進計画を協議しながら『人権啓発と学び合いの場』となる事業を計画する。

＜事業のねらい（目標）＞

(1) 被災地へ哀悼の意を表し、共感するにあわせ、自らの生き方を省みながらこれからの生き方を考え、よりよく生きようという意欲を高める。(自尊感情の育成)

(2)一人一人の感性(人権感覚)を高めながら、みんなでよりよい地域をつくっていこうという実践力、態度を育てる（人間関係調整力の育成）

（取組の頻度と経緯）

赤江地区では、これまで交流センターが中心となり人権講演会の開催、伝統文化や行事を活用したコミュニケーションの場づくり、保育所（園）・小学校・中学校・

家庭が連携した学び合いのある場づくり、また地域全体が一体となり取り組める事業など総合的に取り組んできた。そこで、部会からの提案をもとに協議会はこれまで継続して取り組んだ事業の中から、規模は小さいが演奏家たちを招き、地域へ提供してきた「心が響き合う機会と場（ミニ演奏会）」に着目した。このような経緯で、山陰フィルハーモニー管弦楽団と小学校、中学校、地域が連携・協力して、『山陰フィルあかえふれあいコンサート』の開催を目指し取り組む事業案が決定した。

（取組上の課題と、それに対して講じた工夫）

事業の規模を考えた上で、期待する来場者の数、チケットの販売方法、著作権の確保、当日の運営(受付、駐車場、安全、会場、照明、音響、司会)など、実行委員会では推進計画を細かく検討すると同時に、協議の中心には「人への気配り」を優先しながら話し合いを重ねた。特に、当日の来場者数を想定して、「駐車場と会場内での安全対策」については慎重に意見の交換を行った。

また、コンサートが来場者との一体感とともに進行していくよう、コンサートを構成するプログラムの内容についても、様々なアイデアを吟味、確認しながら話し合った。

構成１	山陰フィルハーモニー管弦楽団の演奏
構成２	小学生、中学生の指揮者体験コーナー
構成３	安来一中と安来三中、山陰フィルハーモニー管弦楽団による合同演奏

構成４	安来三中学校長によるクラリネット共演
構成５	全員合唱「ふるさと」、「赤江小学校校歌」
構成６	音楽のある生活について指揮者が子どもや大人に語りかけるコーナー

４．実践事例の実績、実施による効果

（取組の実績）

出演者を含む主催者側（238 名）の内訳

所属	中学校(安来１中・３中)吹奏楽部・弦楽部	山陰フィル団員	実行委員会	主催者側総数
人数	76 名	79 名	83 名	238 名

コンサート当日は小雨模様で、車両の渋滞が発生したが、駐車場を担当した消防団の的確な誘導により予定通りに開催できた。また、会場の小学校体育館は870名を越える人々で盛会となり、事業は計画通り実施できた。

来場者数（640 名）の内訳

年代	幼児	小学生	中学生	高校生	大学生	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代以上
割合	1%	13%	6%	4%	0%	2%	10%	18%	16%	30%

来場者の感想（アンケート結果）

評価	大変よかった	よかった	あまりよくなかった
割合	８９％	１１％	０％

（これまでの経験により図った事項）

事業の趣旨に沿って、「相手を大切にする思いやりのある対応」等、実行委員一人一人の心構えについて、実行委員会では推進計画とあわせ共通理解(周知徹底)を図った。この点については、日々の経験(職業意識)を通して**身についている感性**（人権感覚）でもあり、推進計画書には「**心の構え**」として文頭に明記した。

受付担当：　受付口では、笑顔でお客様をお迎えすることが大切です。お帰りの際には、アンケート回収と同時に、「ありがとうございました」と声かけをし、ご来場いただいた感謝の気持ちを伝えるとともに、速やかな退場を促しましょう。

会場運営：　コンサート中は出入口付近と壁際に適当な間隔を置いて立ち、気分の悪くなった方などの対応に備えましょう。

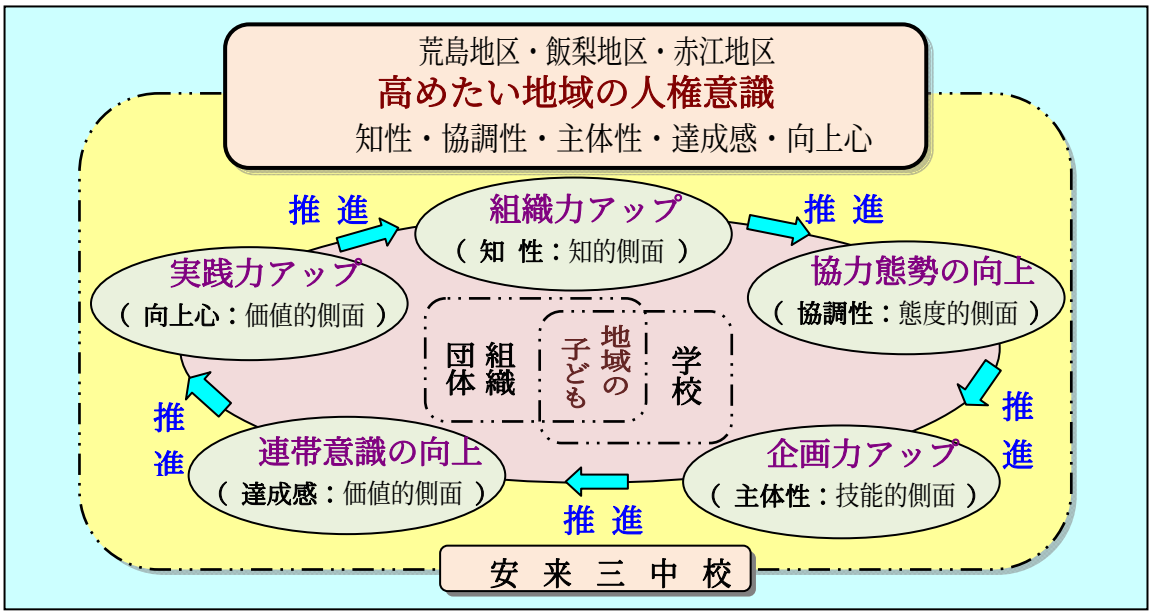
駐車場係：　駐車場スタッフは、お客様と一番最初にお会いするスタッフです。明るく、「いらっしゃいませ！」とお迎えをしましょう。コンサートへの期待を高めることでしょう。等　（各担当ごとの推進計画書中、部分抜粋）

５．実践事例についての評価

（取組についての検証）

本事業の＜ねらい＞に迫るために様々な工夫を試みたことで、事後、実践をふりかえりながら、実行委員会(協議会)は大きな目標を遂げたという達成感を味わうことができた。赤江部会でも、協議会の実践は、そのまま協議会の機能と推進力を高めたことを確認(検証)し合った。（下図参照）

協議会にとって、実行委員会として重ねた話し合いを通して、「人権に関する知識と理解(知的理解)」は欠かすことのできない大切な前提(必要条件)であることも再認識した。つまり、話し合いの場はそのまま「人権教育の研修会」にもなっていたと言える。さらに、事業の始まり(赤江部会の提案)から事業の終了(来場者の評価)までのサイクルを一巡したとき、「協調性・主体性・達成感・向上心」など実践を通して学び合ったことは、即ち、協議会に属するメンバー一人一人の人権感覚を高めることにもつながったと実感している。



このことは、協議会の人権意識と組織力のアップが常時的に図られ、その拡大こそ、「地域の人権（意識を育て高める)教育」へと発展(啓発)していく順路に他ならないといった、それは「気づき」(検証)でもある。

（保護者や地域住民からの反応）

＊ 今日までの準備、お疲れ様でした。会場に来てからスタッフの方々の雰囲気もよく、気持ちよく入場しました。手づくりの温かいコンサートに、心がほっとしました。そして、音色と演奏はすばらしくみがかれたもので、圧巻のテクニックだと思いました。とても満足でき、良い気持ちになりました。

＊ コンサートの趣旨がよかったと思います。地元の子どもたちにも活躍の場となりました。地域のまとまりのよさを感じました。実行委員会のみなさま、大変お疲れ様でした。

＊ 安来一中、三中の皆さん、スゴイ！　感動と元気ありがとう。私たちも、もっともっと前向きにがんばります。ありがとう。

＊ 演奏される方はもちろんのこと、屋外で手助けをされるたくさんの方々が笑顔で迎えて下さって、とても好感をもちました。ありがとうございました。

来場者の感想（抜粋）

（これからの課題と感じていること）

「音楽」は言葉の種類や国境に関係なく、その音色で人々の心に共感を誘い、感動を与える価値を内包している。そして「あかえふれあいコンサート」では、「言葉の壁」、「心の壁」を越えてふれ合うことの大切さについて提言する機会と場として安来三中は参画した。つまり、人権教育の指導方法「第三次とりまとめ」のなかで、第1節の３「家庭・地域、関係機関との連携及び校種間の連携」について研究実践したと考えている。

平成 23 年度：安来三中 PTA 教育文化部実施「人権・同和教育ｱﾝｹｰﾄ」より（抜粋）

人権尊重のため、学校教育で人権教育はどのような視点で進めたらよいと思いますか

① 「人を大切にする心や態度」を育てる内容のある教育を進めていく

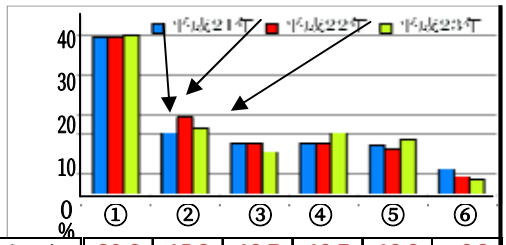
② 障がいのある人や高齢の人たちとのふれあいと、交流体験を通じた教育を進める

③ 「差別することは、悪いことである」という意識を育てる教育を進める

④ すべての生徒が「人権」について考える教育を進める

⑤ 差別の歴史的な経緯や現状などが理解できる教育を進めていく

⑥ 性差別に対する理解を深めるとともに、差別と向き合っていく力を育てる



	①	②	③	④	⑤	⑥
平成21年	39.6	15.3	12.7	12.7	12.3	6.3
平成22年	39.5	19.3	12.9	12.9	11.1	4.3
平成23年	40.1	16.6	10.5	15.4	13.8	3.6

安来三中 PTA 教育文化部内での検証（抜粋）

今年の集計をもとに教育文化部で話し合ったところ、人権・同和教育に関する問題や課題は、全体的に家族（大人たち）からの影響も大きいと考えられ、この部分では、「まず、何よりも、保護者が人権教育に関心をもちながら、正しい知識と認識をもって子どもに向かうことが大切だ」という考えや感想が多くありました。特に、研修会に参加された保護者は、学んだことや気づいたことなど、ぜひ子どもにも教えてあげてほしいです。

安来三中PTA教育文化部は人権・同和教育の意識調査を3か年実施して、「人を大切にする心や態度を育てる教育の推進」を多くの保護者が期待している状況をまとめた。これは三中校区(赤江、荒島、飯梨)の保護者、地域の人々の期待でもあり、願いとも言える。安来三中ではこの部分を、地域や関係諸機関との積極的な連携・協力をしていく上での基本姿勢(課題)として、今後も取り組んでいくことを確認し合っている。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

安来市立第三中学校
地域や関係諸機関との連携・協力に重点を置いた事例である。「よりよい集団づくり」と「地域との連携」を柱として,人権教育を学校の教育活動の基底に据えて各教科等で縦断的,横断的に学習できる年間指導計画を作成した上で,地域の人々とかかわる場面や内容を意図的に設定し,地域の人材を積極的に授業に取り込むなど,地域とともに学ぶ地域ぐるみの人権教育推進を目指している。具体的には,人権・同和教育を連携の基底に据えつつ「地域の教育力を高める」ことを共通のねらいとして校区内の交流センターと連携し,「ふるさと教育」の実践,人権について考える「懇話会」の開催,「ふれあいコンサート」づくりへの参画という三つの学習活動を展開している。他の地域や学校における人権教育促進の取組への波及効果が期待できる。